

五輪で競技入りが期待されるパルクール

初の世界選手権、日本で開催

障害物を飛び越えるなどしながらタイムや技を競うパルクールの第1回世界選手権が10月14日から3日間、東京・有明アーバンスポーツパークで開催された。パルクールは、若者に人気のあるスケートボードと同じ都市型の「アーバンスポーツ」と呼ばれており、2028年ロサンゼルス五輪での実施競技入りが期待されている。

この大会には、約40カ国・地域から約100選手が参加。主催する国際体操連盟の渡辺守成会長は開会式で「コロナで延期されたが、ついに障害を乗り越えた。障害を越えてゴールを目指すパルクールは、人生と同じ」とあいさつした。

障害物を使って技を繰り出すフリースタイルの女子決勝で、山本華歩選手が銀メダルを獲得し、日本勢で唯一の表彰台に立った。出だしで段差を使った連続宙返り技を見事に決めた山本選手は「満点の演技。やりたいことが全部できて、ほっとした」と喜びに浸った。

ゴールまでの速さを競うスピードの女子決勝で4位だった泉ひかり選手は「楽しかった。走り切れた。もっと競技を知ってもらえたらうれしい」と話した。



女子フリースタイル決勝の山本選手 (AFP時事)



女子フリースタイルで2位の山本選手 (左) (AFP時事)

横浜Mが3年ぶり5度目の優勝

J1リーグ 最終節で川崎の3連覇阻む

Jリーグ1部（J1リーグ）は5日、各地で最終節の全9試合が行われ、横浜F・マリノス（横浜M）がヴィッセル神戸に3-1で快勝し、勝ち点68で2019年以来的優勝を遂げた。鹿島アントラーズの8度、次ぐ歴代単独2位となる5度目の制覇。3連覇を目指した2位の川崎フロンターレはFC東京に3-2で競り勝ったが、勝ち点で2点及ばなかった。最終節での優勝決定は3年ぶり。

最優秀選手（MVP）には、優勝した横浜MのDF岩田智輝選手が初めて選ばれた。

横浜Mは積極的なサッカーをシーズン通してやり続けた。リードした終盤でも、ただボールをキープして時間を稼ぐようなプレーは見せず、豊富な運動量でとことん攻め続けた。一方で、チームを守り支えたのがMVPに選ばれた25歳の岩田選手。冷静に相手の動きを読んでピンチの芽を摘み、積極的に攻め上がる姿勢も光った。「ただ（自分の）成長のため、優勝のために頑張ってきた。努力が報われてよかった」と充実したシーズンを振り返った。

J1リーグは例年なら12月に終了するが、今年はワイルドカップ（W杯）カタール大会が11月、12月開催となったため、これに合わせて終了時期が1カ月以上早められた。



神戸-横浜M、後半、相手からボールを奪う横浜Mの岩田選手 (左)



優勝を決め、シャウレを掲げて喜ぶ横浜Mのケビン・マスカット監督 (中央)

渡部選手が日本女子最年少で金メダル

世界体操選手権

橋本選手は男子個人総合で初優勝

体操の世界選手権は英国のリバプールで行われ、6日に行われた女子種目別の平均台決勝で18歳2カ月の渡部葉月選手が日本女子最年少で金メダルを獲得した。この種目は昨年の芦川うらら選手に続いて日本勢が制した。

渡部選手は「今までで一番」という緊張で、決勝の演技前はがくと足が震えて



女子種目別平均台決勝の渡部選手 (AFP時事)

いた。それでも、出だしで宙返りしながら平均台の上にとびたつと止まり、続く連続技もしっかりとまとめ、2回半ひねりの着地もきちつと決めた。優勝候補の米國と中国の選手がいずれも落下し、渡部選手の金メダルが決まった。



表彰式で笑顔を見せる渡部選手 (中央) と3位の宮田亜子選手 (右) (AFP時事)

渡部選手は「まさか自分が1位なんて。実感が湧かない」と、うれし涙を流しながら話した。「跳躍の高さは世界でも負けないくらいあると思う。思い切った、ダイナミックな演技ができた」と喜んだ。けが人が出たため、補欠からの繰り上がりで初の世界選手権出場となったが、団体総合の決勝進出にも貢献する大健闘を見せた。

男子の橋本大輝選手は4日の個人総合決勝で初優勝。昨年の東京五輪での個人総合でも優勝しており、五輪と世界選手権の両方を制したのは日本勢では内村航平さんに次いで2人目。この大会で日本勢は金2、銀3、銅3のメダル8個を獲得した。

村上選手が初優勝、愛媛県勢で初の日本一

全日本剣道選手権

剣道の第70回全日本選手権は3日、東京・日本武道館で行われ、村上哲彦5段が2度目の出場で初優勝を果たした。愛媛県勢では初の日本一。

村上選手は決勝で、世界選手権優勝経験者で10度の出場を誇る安藤翔6段の猛攻をよく耐え、得意のメンをき

いに打ち込み、勝利をつかんだ。この快勝に「実感はないが、稽古してきたことができた」と30歳でつかんだ栄冠を喜んだ。

愛媛県勢に就職後、左手首の骨に病気を抱えて2年ほど実戦から離れた。それでも、「できることをやる」と努力を重ね、2017年の愛媛国体では団体優勝に貢献した。

剣道を始めた4歳から、ずっと愛媛で鍛錬してきた。強豪ひしめく関東などの大学には進まず、「地元でどうやって勝てるか考えることを楽しんで」とすがすがしい笑顔で話した。



決勝で安藤選手 (左) と対戦する村上選手



優勝し、天皇杯を手にする村上選手